

第十一回特別展

横穴墓

よこ

あな

ぼ



中和田



吉見



長柄

立正大学博物館

ご挨拶

古墳時代の墓制といえば、前方後円墳に代表される高塚古墳を連想してしまい、傾斜面を掘削して構築された横穴墓の存在は忘れられがちである。しかし、傾斜面の上方の平坦地に高塚を築いた横穴墓の存在から知られるように、横穴墓と高塚は無関係ではない。

しかも、日本考古学のあゆみを振り返れば、明治時代に坪井正五郎らが埼玉県吉見百穴などを熱心に調査し、墳墓か穴居かを論じたのも、横穴墓を対象とした議論であった。穴居にはコロボックルが住んだと坪井は主張した。そんな白熱した論戦が繰り広げられたことも、すでに忘れ去られてしまって、久しい時が過ぎ去った。

そこで、今回は、こうした忘れられがちな横穴墓について広く知っていただくために、横穴墓を取り上げた。具体的には、学史上著名な吉見百穴のほか、長柄横穴墓群や千代丸・力丸横穴墓群、さらには今回初公開の中和田横穴墓群の資料を紹介する。

ぜひ、多くの方が観覧され、横穴墓についての認識を深められることを希望する。

2016年11月21日

立正大学博物館館長 時枝 務

目次

ご挨拶／目次／凡例

1. はじめに	1
2. 横穴墓の概要	2
3. 吉見百穴	5
4. 長柄横穴墓群と千代丸・力丸横穴墓群	12
5. 立正大学が調査した横穴墓群	16
6. おわりに ～横穴墓研究の課題～	29

凡例

- (1) 本図録は、立正大学博物館：第11回特別展「横穴墓」の展示図録として作成しました。
- (2) 本図録の作成は池上悟（立正大学博物館担当副学長・文学部教授）の指示により、大塚美紗登（当館専門員）が行い、池田奈緒子（当館非常勤学芸員）が助力しました。
- (3) 本図録の作成にあたり、引用・参考とした文献は巻末に掲げました。
- (4) 本展示の開催にあたり、以下の機関・方々にご協力を賜りました。感謝申し上げます。

熊谷市教育委員会 長柄町教育委員会 根岸友憲 坂詰秀一 井上尚明
松本昌久 中山晋 竹花宏之 足立佳代 (順不同 敬称略)

【表紙の写真】

上：中和田横穴墓群

中：吉見百穴（明治20年代）

下：千代丸・力丸横穴墓群 26号墓遺物出土状況

【裏表紙の写真】

中和田12号墓の内部

1 はじめに

横穴墓とは、丘陵斜面ないしは崖面を横に掘削して埋葬用の施設を構築したものであり、古墳時代後・終末期に日本列島内に地域を限定して展開している。

明治の日本考古学の萌芽期には「横穴」の名称で、当時の考古学の主要な問題の一つとして取り上げられ、各地の存在が明確にされた。「横穴墓」の名称が一般化したのは、全国的に調査が進展した昭和 50 年代以降であり、それほど古いものではない。主として普通名詞としての「横穴」から古墳時代の埋葬施設を峻別することを目指した名称である。

横穴墓の調査が進展したのは昭和 30 年代以降である。赤星直忠は神奈川県を基盤として調査した資料をもとに、横穴墓の型式変遷を考案した。赤星の想定した横穴墓構造の変遷は、当時の人々が居住した竪穴住居の構造を写した屋根型天井構造横穴墓が古く、これが徐々に簡略化していくというものであった。正整な構造から簡略化した構造への変遷は、現在の視点から判断しても理解されるものである。

この赤星に対して、島根大学の山本清の研究視点は、横穴墓の型式変遷を出土遺物を重視して想定したものであった。この成果は、長期間に及ぶ使用結果の将来した同時期における複数の異なった構造の横穴墓の存在確認であり、6 世紀半ばに遡る横穴墓の存在の確認と、横穴墓の起源を北部九州に想定した点である。

この北部九州における横穴墓起源の想定は、昭和 40 年代末に実施された福岡県・竹並遺跡の調査により明確となった。竹並遺跡の出土遺物により 5 世紀後半代に遡ることが想定される横穴墓の構造は、遺体を埋葬する玄室に通じる入口部である羨道が外側に従って高くなっており、斜め上から横穴墓内部に入る構造となっている。

この横穴墓の構造は、4 世紀末以来に北部九州に定着した初期横穴式石室である「竪穴系横口石室」の構造を写しており、簡略化した横穴系の埋葬施設として発現したものと考えられる。昭和 40 年代以降、北部九州各地で行われた初期横穴墓の調査で、横穴墓北部九州発現説は確定したかの感があったが、2004 年に韓国南部の百済・公州の地において 23 基からなる丹芝里横穴墓群が調査され、横穴墓起源問題に一石を投じることとなった。

丹芝里横穴墓群の横穴墓の構造は、北部九州の初期横穴墓構造に類似した入口部から内部に向かって下降するものである。確認された出土遺物の比較では、北部九州所在横穴墓が若干古いものと位置付けられている。しかし横穴墓構造の規範となった竪穴系横口石室自体は朝鮮半島南部から北部九州の地に波及している点を勘案すると、百済の地におけるより古い横穴墓の存在もまた考えられるところである。

立正大学考古学研究室は、長い年月にわたって関東各地の横穴墓を調査してきた。この成果は、考古学同窓の多くが横穴墓の調査に携わったことにより、史跡の指定などに積極的に関わってきた点に表れている。

今回の横穴墓の展示では、考古学研究室の調査してきた横穴墓群を扱って、横穴墓研究の課題を確認しておきたい。



第 1 図 長岡百穴横穴墓群

2 横穴墓の概要

◆横穴墓の分布

日本列島に展開した横穴墓は、古墳文化が及んだ範囲に均一に分布しているものではない。横穴墓は古墳時代後期に群集性を特徴として展開しており、小形古墳が地区を限定して築造された群集墳と類似した性格の墳墓と考えられる。しかしながら、古墳時代において視覚的に確認できる墳丘を有する古墳は、墳丘を有さない様々な墳墓の上位に位置づけられるものであり、横穴墓に埋葬された階層は一般的には支配者階層の末端部を形成していたものと考えられるものである。

横穴墓は、発現の地と想定される北部九州地域である福岡、大分県域、次いで隣接する熊本県域と宮崎県北部地域に展開している。特に熊本県域においては装飾横穴墓が濃密に展開しており、地域の特徴となっている。

中国地方では島根県東部の出雲地域を中心として隣接する島根県西部、鳥取県西部、広島県・岡山県の山間部に確認される。

古墳文化の中核地である近畿地方では、大阪府東部の丘陵地区、奈良盆地の東部、京都府の限定された地区などに集中して横穴墓が展開しており、広く及ぶものではない。北陸地方では石川県域と富山県西半部に認められる。

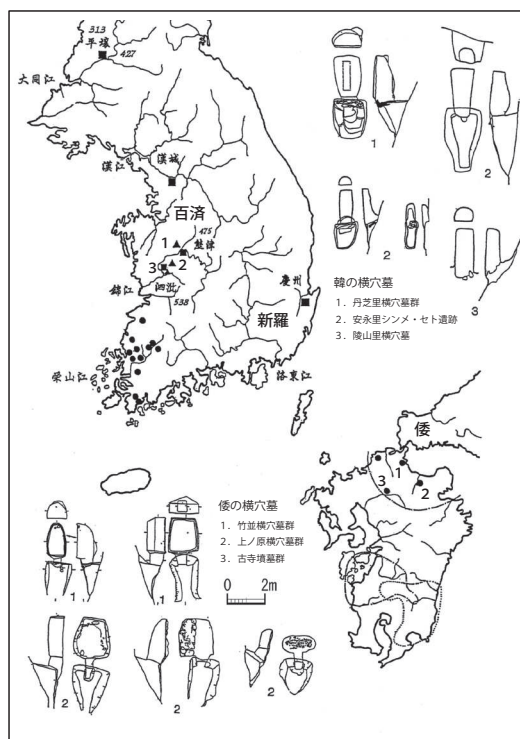
東海地方では静岡県西部の遠江地域に集中しており、東部の駿河・伊豆地域、その他の地区に若干分布している。特に遠江地域においては優れた副葬品を伴う横穴墓が多く造営されており、地区の支配者階層の墳墓として位置づけられる例も知られる。

東北地方における横穴墓の分布は、福島県域の浜通り全域、中通りでは須賀川市域以南、会津地域に若干であり、宮城県域ではほぼ全域に展開しており、岩手県域には及んでいない。

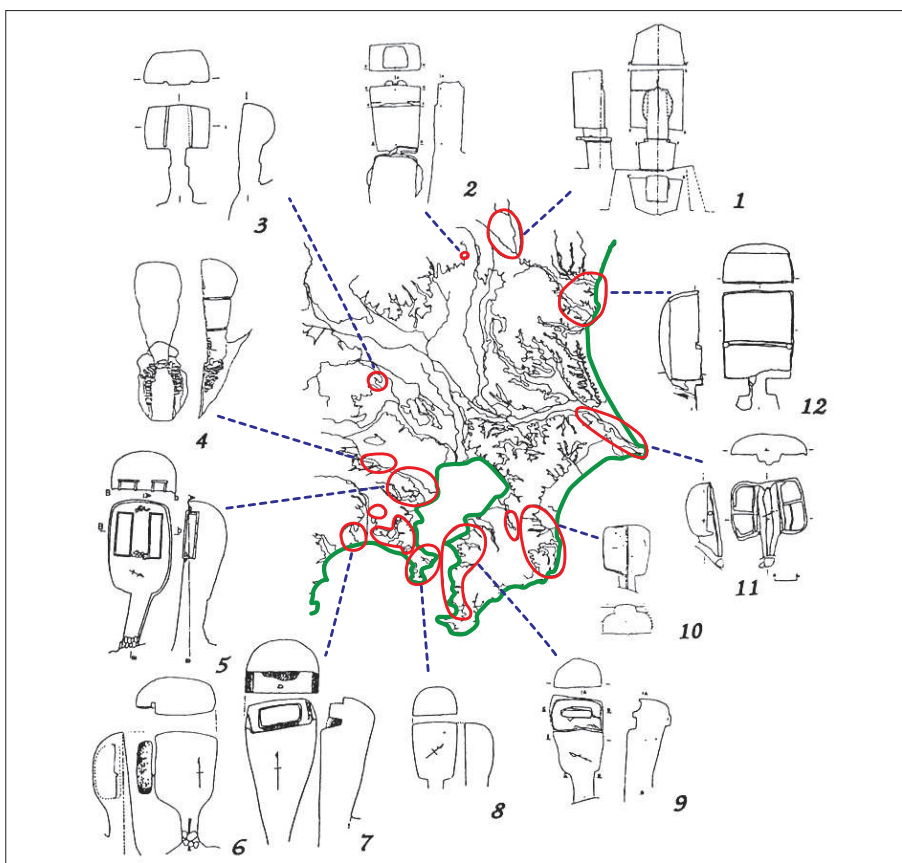
東北地域における横穴墓研究は、昭和 40 年

代に氏家和典によって推進された。地方内部における横穴墓の展開を大和政権による古代東北開拓と関連して考案されたものであり、以後の研究の基本となった。

関東地方における横穴墓は、沿岸部を中心として展開している。神奈川県湘南、三浦半島地区、多摩丘陵地区、東京都では多摩川流域に認められる。埼玉県域では北部の吉見・黒岩地区に数百基が集中しており、この他では荒川沿いの台地縁辺に少数が認められる。房総半島地域では、内房地区は木更津・君津地区に集中しており、外房地区では茂原・長柄地区に集中しながら全域に分布している。茨城県域では北半部の那珂川・久慈川流域に集中しており、この連続は栃木県那須地域にも及んでいる。



第2図 九州と朝鮮半島の横穴墓



第3図 関東地方の横穴墓の展開

◆関東地方の横穴墓

関東地方では、6世紀の後半代に横穴墓が出現している。多摩丘陵地区、北武蔵・吉見地区、房総地域、茨城県北部地区などで確認されており、7世紀代に横穴墓が主体的に展開した地域である。ほぼ同時期に横穴墓制が受容されているが、それぞれの地区の初現期横穴墓の構造は異なっており、源流の地の違いを反映している。

多摩丘陵地区には、複数の系譜の異なった横穴墓が初現している。①・川崎市津田山地区に確認される初現期横穴墓の構造は、長方形玄室・穹窿状天井構造で内部に組合せ石棺を納めており、東海地方の遠江地区に展開した石棺納置横穴墓の波及と理解される。

②・湘南大磯丘陵地区では、長方形玄室平面・穹窿状天井構造で奥ないしは横に造り付け石棺を付設する構造の横穴墓が確認されており、こ

れも東海系横穴墓の一つと考えられる。この構造の横穴墓は、房総半島においても若干数の分布を確認することができる。

③・横浜市区ヶ尾地区では、正方形玄室平面・穹窿状天井構造で、玄室床面の四周と中央部に排水溝を施す特徴の横穴墓が確認される。この構造の横穴墓は、九州地域の6世紀中葉以降に認められ、山陰の出雲地域、東国各地の横穴墓に確認されるところであり、東北は仙台周辺にも及んでいる。九州起源の主要な横穴墓構造の波及例と考えられる。

④・北武蔵吉見・黒岩地区における初現期横穴墓は、横長長方形玄室平面・穹窿状天井構造であり、玄室内部の左右に棺座を設けている。この構造の横穴墓は、山陰出雲において創出された構造であり、出雲系横穴墓として東北地方

にまで及んでいる。

⑤・房総半島地域においては、②の様相の横穴墓のほか、外房地区では小形の正方形玄室平面・穹窿状天井構造の横穴墓も初現期横穴墓として確認できる。

⑥・茨城県北部の久慈川流域で確認できる初現期横穴墓の構造は、長方形玄室平面・家形天井構造で、玄室奥側に一段高く棺座を造作するものであり、北部九州の大分県域に展開した横穴墓構造を写したものである。

これら関東各地の初現期横穴墓は、それぞれに横穴墓構造の系譜を異にしており、西方各地からの波及の結果として現出している。このことは、遺物の出土状態から復元できる横穴墓の墓前域で実修された埋葬儀礼の共通性を勘案すると、異なった横穴墓の源流の地からの一定規模の集団の移動を想定させるところである。

関東各地に横穴墓制が波及・定着した後は、それぞれの地区に特徴的な横穴墓が展開している。関東地方各地の特徴を反映した横穴墓を、展開期横穴墓と呼んでいる。

①・多摩川上流域の日野・多摩・国分寺・三

鷹地区では、7世紀前半代以降に地区首長墓として構築された複室胴張り構造の横穴式石室を規範とした横穴墓が展開している。

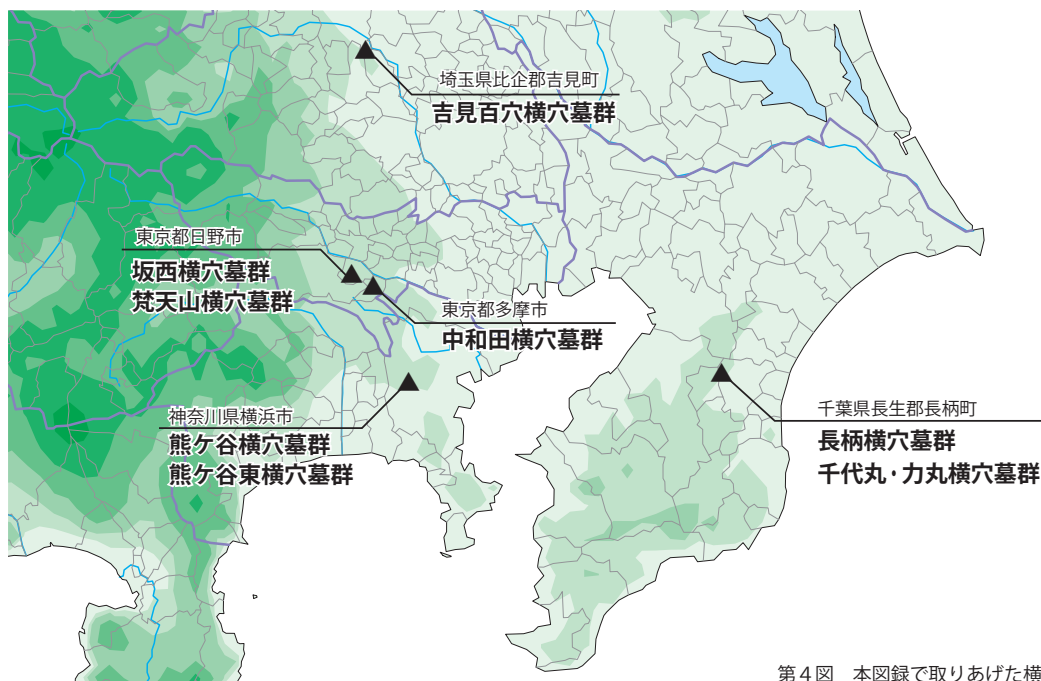
首長墓と一体となった麾下集団の墳墓の様相を確認できる。

②・房総半島の外房茂原・長柄地区では、7世紀初頭以後に高壇式と呼ばれる、羨道と玄室との境部分を高く区画した大形横穴墓が展開している。この玄室平面形が横長である点においても留意される構造である。

③・横穴墓の存在の稀な栃木県北部においては長岡百穴の横穴墓構造が特異である。長方形玄室平面・平天井構造であり、奥壁は垂直に立ち上がっている。この構造は地域の首長墓として築造された切石を使用した横穴式石室の構造を写したものと理解される。

関東地方の横穴墓は、ここに確認したように様々に変容しながら、特定地域の有力集団の墓制として造営されている。

横穴墓群存在の意義は、在地首長墓および同時期に併存する高塚群集墳との関連を考慮して考えなければならない。



第4図 本図録で取りあげた横穴墓

3 吉見百穴

◆吉見百穴横穴墓群の様相

吉見百穴横穴墓群の全体的様相は、『吉見町史』編さん事業の一環として昭和50年に金井塚良一によりまとめられ、地区首長墓としての横穴式石室墳との関連が考慮されている。

吉見百穴横穴墓群の200基を越える横穴墓の構造は、大形から小形、横長玄室平面から正方形を経て長方形化、有棺座から無棺座への変化として理解することができ、6世紀後半代から7世紀代後半代の約100年間にわたる5期の変遷を確認できる。

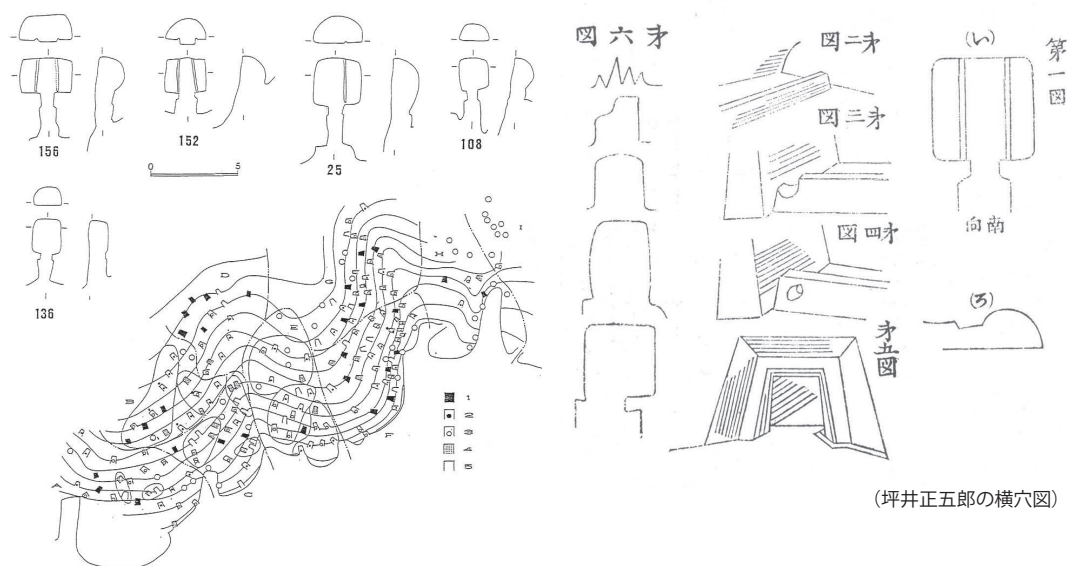
各期の横穴墓の分布状態を見ると、近畿地方の群集墳で想定された「限定された個別墓域中における累代的形成」を確認できない。同時期の横穴墓は近接して小群をなしており、集団墓の様相を示している。横穴墓造営集団中における個別造営主体の独立性が希薄であり、地区支配者層に付属した状況にあったものと考えられる。

吉見丘陵の北東約11kmには、武蔵地域最有力の後期古墳群である埼玉古墳群が位置している。5世紀後半代以降100m級の前方後円

墳を継続築造してきた埼玉古墳群にあって、6世紀の末葉に位置づけられる中の山古墳は全長79mと規模を縮小している。同時期に周辺には100m級の前方後円墳が複数築造されており、埼玉中心勢力の凋落と周辺勢力の勃興が見られる。この在地における体制の変化時に新たな横穴墓制の導入を確認できる。



第5図 発掘直後の吉見百穴横穴墓群遠景〈根岸友恵氏蔵〉



(坪井正五郎の横穴図)

第6図 吉見百穴横穴墓の分布と構造

◆根岸武香と坪井正五郎による記録

根岸家には一枚刷りの「武蔵國比企郡西吉見村百穴之記」が伝えられている。明治21年5月に根岸武香が執筆し、これを明治41年に更生したものであり、「價金貳錢」で頒布したものである。明治20年の百穴の発掘に至る由来と、地主である根岸武香、大沢藤助をはじめとする地元民の助成の状況を明記したものである。

この中で地元伝わった、横穴は「昔ヒの雨の降りしとき里人の遁げ隠れたる所なり」とする説は、江戸時代に広まったところであり、著名な茨城県ひたちなか市の十五郎穴横穴の名称の由来となったものでもある。

この百穴之記の内容と同じものは、根岸武香の名前で明治36年6月発行の『東京人類学会雑誌』第18巻第207号に掲載された「武蔵國横見郡北吉見村百穴の記」である。

また大沢藤助と根岸武香の連名で、発掘調査直後の明治20年9月に埼玉縣に提出された百穴の保存についての「意見上申書」がある。大金を費やして完遂した百穴の成果を後世に保存するための意見上申である。これに関するものとしては、坪井、根岸、大沢の連名で記された「埼玉縣横見郡吉見村百穴保存の件」と題する資料も知られる。

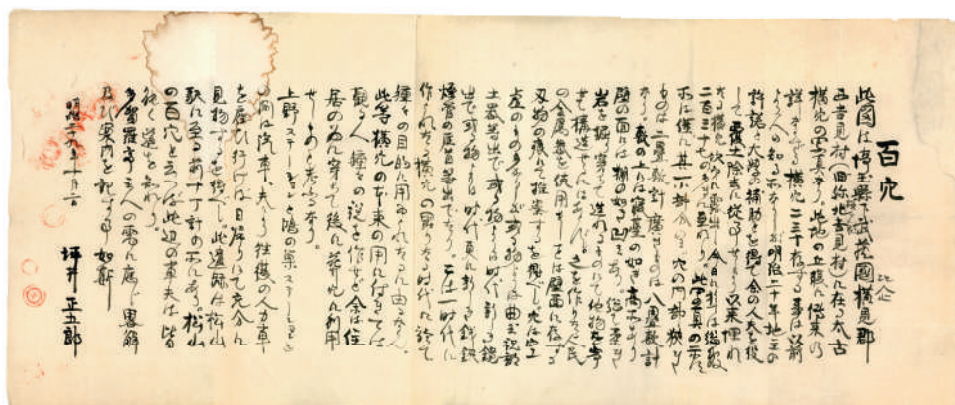
坪井正五郎の「百穴」と記した文書は、立正大学坂詰秀一名誉教授の提供されたものである。明治29年10月に「多賀羅亭主人の需めに應じて」百穴の写真の説明として書かれたものである。ここでは、「此等横穴の本来の用に付きては觀る人種々に作せど余は住居の為に穿ちて後に葬穴として利用した」と考えることが明記されている。



第7図 「武蔵國比企郡西吉見村百穴之記」〈根岸友憲氏蔵〉



第8図 発掘調査の記念写真〈根岸友憲氏蔵〉



第9図 坪井正五郎書「百穴」〈立正大学考古学研究室蔵〉

◆明治期の調査と穴居論争

埼玉県北部の吉見丘陵には、国の史跡に指定されている吉見百穴横穴墓群と、隣接して黒岩横穴墓群が所在している。吉見百穴横穴墓群は、明治期の日本考古学の草創期に坪井正五郎が発掘調査し、横穴の性格をめぐる論争が行われたことで著名なものである。

吉見・黒岩の横穴墓は、当時日本に居て各地の遺跡に興味をもっていた E.S.Morse、H.P.Shiebold など訪れており、日本を代表する遺跡であったことが確認ができる。

坪井正五郎による吉見百穴横穴墓群の発掘調査は、地元の有力者の根岸武香の協力のもとに明治 20 (1887) 年に行われ 237 基の横穴墓の存在を明らかにしている。当時坪井正五郎は、人類学専攻の東京大学の大学院生であり、前年の明治 19 年には初めての古墳の学問的な調査を栃木県足利市で実施している。

坪井正五郎の吉見百穴における調査の以前、明治 10 年代における横穴は、立地が台地ないしは丘陵の先端である点が貝塚に似ていることなどから、貝塚と同じ石器時代の遺跡であり、屋には海で貝を採集していた人民が、夜には横穴を住居として使用したものと考えられていた。この点は坪井の調査により、横穴内部壁面に確認できる整形痕、細かな造作は鉄器によるものと改めて確認され、石器時代ではなく金属器使用時代の所産と位置づけられた。

明治 10 (1877) 年には、欧州の Archaeology は古物学として我が国に紹介されており、この中で道具の材質による年代の違い、石器・青銅器・鉄器の 3 時代区分法が紹介されており、これらの知識を基にした見解といえよう。

坪井は吉見百穴の多数の横穴墓の特徴を、①・小さき戸を以て室を閉じること、②・水掃けに深く意を用いていること、③・棚のあること、④・多くの横穴の構造が大同小異で相隔たる遠からざる時に作ったと見えること、⑤・室内に床の

あることとまとめ、文献史料をもとにした先行研究を考慮して、住居のために構築されたものと想定している。

しかし、横穴に居住したのは日本人の祖先ではなく、先住民族の土蜘蛛と呼ばれた人種であろうとした。また横穴からの人骨の出土は、曲玉時代に日本人の祖先が横穴を墳墓として再利用したものであろうとした。

ここに横穴の機能をめぐって白井光太郎との間に論争が惹き起こされ、「穴居論争」と呼ばれている。白井は横穴からの人骨の出土は、横穴が墳墓として構築されたことによるものであり、新たに開口された横穴からは副葬品を伴った人骨が出土することから、横穴は墳墓とした。

これに対して坪井は、中国など周辺地域の民族事例を根拠として対抗している。「穴居論争」は、同時期に展開した石器時代人種をめぐる「コロボックル論争」、さらには明治 22 年から 25 年に坪井が欧州に留学したことにより、終末は明確になってはいないが、明治 30 年代には横穴は墳墓として位置づけられるようになっていった。



坪井正五郎
(1863 ~ 1913)



白井光太郎
(1863 ~ 1932)

第 10 図 「穴居論争」の論者

◆吉見百穴をめぐる人びと

根岸家は、吉見百穴の地元大里郡青山村で代々名主をつとめた素封家であり、先祖は小田原北条氏配下の松山城主上田氏に仕えた。天正18（1590）年以降に帰農している。

11代目の根岸友山（1810～1890）は、剣術を千葉周作に学んだ剣豪であり、文久3年には幕府によって組織された浪士組に参加して京都にのぼっている。

根岸武香（1839～1902）は12代目子孫であり、明治維新後には入間県・熊谷県の区長職、埼玉県会議員、県会議長、明治27年には貴族院多額納税議員に選出されるなど、要職をつとめている。

また文化活動にも貢献しており、埼玉県内の出土品を帝室博物館に寄贈するなどしている。

考古学関連では、明治20年の吉見百穴の調査に先立って、明治10年11月に近隣の黒岩横穴を学問的な期待と目的をもって発掘している。明治10年はモースの大森貝塚の発掘、百科全書の一つとして『古物学』が刊行された年であり、科学的考古学の起点となった。同年に行われた調査は歴史的に重要なものであった。明治期には、多くの在日外国人も横穴の視察に訪れている。日本考古学の草創に関わり大森貝



根岸武香
(1839～1902)

塚の発掘で知られる E.S.Morse は、日本に滞在中の明治12年8月に吉見百穴を訪れている。「洞窟は崖の面にあり、もとは埋葬窟であったが、その後何度も避難民がそこに住った。遺物類は、すべて、大分前に無くなってしまった。」と簡潔に記しており、正しく墳墓として位置づけている。

根岸家にはモースの描いた水彩画が伝えられている。モースの時代には未だ写真機の使用は普及しておらず、研究対象の貝類類などの優れたスケッチを多く残しているが、国内では水彩画の類例を欠いている。

水彩画は高さ36cm、横101cmの大きさであり、右端に8点の陶器とこの前に刀と銃、左端に3点の縄文土器と石器類、中央に須恵器4



第11図 吉見百穴に立つ根岸武香（前列右）〈根岸友憲氏蔵〉



第12図 吉見百穴出土遺物

点とこの前に石棒が描かれている。根岸家の蒐集品を描いたものと思われる。

須恵器は、提瓶、台付壺、長頸瓶、蓋杯であり、土器の年代は吉見百穴と重なるものもある。

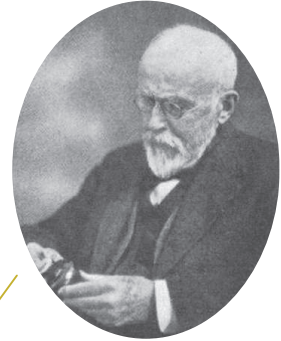
左下にはモースのサインを確認できる。「Edw S Morse / at Mr Negishi's House / at Kabutoyama / Oct 8 1882」というものであり、1882（明治15）年10月の訪問時期を確認することができる。

明治15年は、モースが明治10年から12年までの東京大学雇用期間を終えた後の再来日時であり、多くの陶器、民具などを蒐集した時である。

複数回の訪問時に入手した土器は、1901（明治）34年に刊行された“Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery”に、Kabutoyama出土として土師器の小形壺・甕の破片と18点の須恵器の破片が掲載されている。この中には甲山の洞窟すなわち吉見百穴からの出土品も含まれている可能性もあろう。

横浜に在住した外交官のHeinrich Philipp Sieboldは明治11年に吉見百穴に隣接する黒岩横穴墓群を視察している。このHeinrich Philipp Sieboldは、日本史上に著名な長崎出島の商館医師として在日したPhilipp Franz von

Edward Sylvester
Morse
(1838 ~ 1925)



Shieboldの次男であり、父親とともに日本考古学の研究を行っている。

翌年の明治12年の著作である“Notes on Japanese Archaeology”で、横穴の壁面に残る工具の痕跡から金属器の使用を想定し、Corean Potteryの出土と付近に認められる高麗郡の地名から、朝鮮半島からの渡来人を横穴の被葬者としている。

この見解に対して帝国大学のお雇い外国人教師であった。John Milneは、明治13年の著作“Notes on Stone Implements from Otaru and Hakodate, with a few general remarks on the prehistoric remains of Japan”で、黒川真頼の「穴居考」を引いて、穴居説を述べている。

ともに日本人研究者間で交わされた「穴居論争」に先立つ重要な見解である。



第13図 モースが根岸家に残した水彩画（熊谷市指定有形文化財）〈根岸友憲氏蔵〉

◆坪井正五郎と日本考古学

坪井正五郎は文久3（1863）年に、江戸浜町において福井藩医の坪井信良の子として生まれた。父の信良は越中高岡の出身であり、正五郎の祖父信道のもとで蘭学を学び、後に信道の養子となって次女の牧を妻とした。福井藩医として仕えた後に幕府の奥医師となり、明治維新を迎えた。維新後に一家は徳川慶喜に従って静岡に移り、信良は静岡病院の副院長となった。静岡病院の閉鎖に伴って明治6年には東京に転居し、信良は東京病院の総取締となった。

坪井正五郎は、明治7年に湯島小学校に入学し、明治8年には神田共立学校、翌9年には東京英語学校、明治10年には後の第一高等学校の前身である東京大学予備門に入学している。明治14（1881）年に東京大学に入学し、明治19年に改編された帝国大学を卒業し、大学院に進学した。

大学在学中の明治17年に白井光太郎、福家梅太郎などと人類学会を創設し、この年に本郷弥生町の貝塚において弥生式土器の由来となった壺形土器を発見している。大学院進学前の明治19年の7～9月には、栃木県足利市において足利公園古墳を発掘しており、古墳の科学的

調査の先鞭をつけている。

吉見百穴の調査は大学院に進学した明治20年におこなわれており、多数の横穴を集中して構築した目的が問題とされた。坪井が横穴は先住民族である土蜘蛛が穴居のために構築し、その後日本人の祖先が葬穴として再利用したと考えたのに対して、後に植物学研究を専門とした白井光太郎は、横穴は当初から墳墓として構築されたものとして「穴居論争」がおこった。

両者の間では、貝塚を残した石器時代人をどのような人種と考えるかに相違があり、坪井がアイヌ人の伝承にうかがえるコロボックル説を唱え、白井はアイヌ説をもって対抗した。

坪井正五郎は理科大学助手であった明治22年から25年にかけて欧州に留学し、帰朝して理科大学教授となり、箕作秋坪の娘の直子を娶った。直子の異母兄弟の菊池大麓は数学者として東大総長となり、坪井佳吉は動物学を専攻して東大教授、坪井元八は動物学から転じて西洋史学を専攻して東大教授となっている。

坪井正五郎のその後の人類学上の活躍は、吉見百穴の調査時に初代帝國大学総長であった渡辺洪基の父親静庵が坪井信良と同じく福井藩の



箕作秋坪



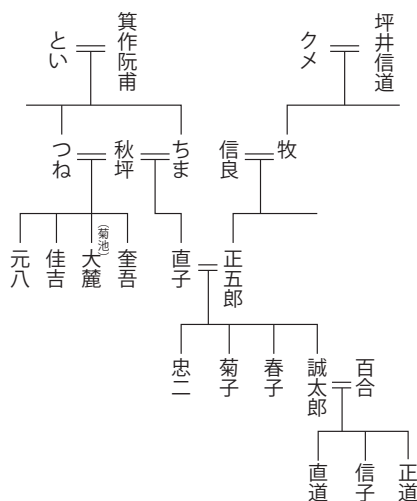
菊池大麓



箕作佳吉



箕作元八



第14図 坪井家系図

医者出身であった関係、さらには兄弟らの援助もあったものとされる。明治32年に理学博士の学位を受領し、明治39年には帝国学士院会員となった。

坪井の考古学上の調査は、足利公園古墳、吉見百穴、芝丸山古墳、西ヶ原貝などを始めとして国内の各所に及んでいる。考古学を含めた人類学の普及、啓蒙に絶大な功績をあげた。

坪井正五郎は、大正2年に急逝した。墓碑銘には「大正二年五月第五会萬国学士院聯合大會ノ露國ペテルブルクニ開カルルヤ委員トシテ参列シ其ノ任務ヲ完ウセシガ突然病ヲ得テ終ニ五月二十六日彼ノ地ニ薨ズ行年五十有一」とある。

直子との間には二男二女があり、明治26年生まれの長男の誠太郎は地質学・鉱山学を専攻して東大教授、明治35年生まれの忠二は地球物理学を専攻して東大教授となっている。

また大正14（1925）年生まれの誠太郎の長男の正道は、東京帝国大学理学部を卒業して薬学部教授となり、日本学士院賞を受賞している。

坪井家は3代にわたり東大教授を輩出する有数の学者の家系として著名である。

平成25（2013）年は、坪井正五郎没後100周年であった。この年に坪井の欧州留学時の日記の内容が、川村伸秀によりまとめられた。『坪井正五郎～日本で最初の人類学者～』であり、この本によって従来明確ではなかった、ロンドンにおける坪井の住所が明らかになった。

「クラバム・ロード、リッチモンド・テラス14番地に下宿していた瀬脇寿雄のもとを訪ねた。瀬脇とは東京大学予備門以来の仲である。」と場所を確認でき、「幸い瀬脇の住んでいる下宿に空き部屋があることが判り、彼の斡旋で坪井もここに下宿することとなった。」とされる。

ロンドンのこの地は、テムズ川の南側であり、付近には、正月五日と誕生日を同じくする夏目漱石も下宿していた。



第15図 吉見百穴調査時の坪井正五郎



第16図 坪井正五郎のロンドンの下宿



第17図 染井霊園の坪井家墓所

4 長柄横穴墓群と千代丸・力丸横穴墓群

◆長柄横穴墓群

千葉県内における横穴墓は、外房の一宮川流域の長生地域、内房の富津地域に集中的に展開しているほか、夷隅川流域を中心とする安房地域に分布している。また北部の利根川流域では、成田市（旧杵取郡下総町）に位置する横穴墓研究史上に著名な西大須賀横穴墓群のほか、河口部の銚子地区に若干数の横穴墓が分布している。

千葉県内最大の密集度合いを示す長柄横穴墓群の所在する長生地域では約 1000 基、長柄町域では約 300 基の横穴墓が確認されている。また埋葬部である玄室を高い造作した特異な構造の「高壇式」の横穴墓が地域の特徴となっており、古くから研究者に注目されてきた。

長柄横穴墓群は、千葉県を代表する古墳時代墳墓の一つの代表例として、昭和 55（1980）年に「長柄横穴群」として群中の 16 基が千葉県史跡に指定された。

さらに平成 5（1993）年には県内主要古墳の発掘調査の一環として調査が行なわれ、その成果に基づいて、平成 7（1995）年には国の史跡として指定された。

長柄横穴墓群は長生郡長柄町徳増に位置す



第 18 図 長柄横穴墓群 位置図

る。横穴墓群は、一宮川水系の大小の河川によって開折された谷戸の、標高 40～50m の斜面に展開しており、西側丘陵に第 1 支群 21 基、東側丘陵に第 2 支群 15 基のあわせて 36 基の横穴墓が所在している。これらの横穴墓は、立地状況から東西あわせて 9 小支群に分けられている。すなわち、横穴墓の造営主体として、9 単位の古代家族の存在が想定される。

長柄横穴墓群を含め長生地域に分布する横穴墓の最大の特徴は、「高壇式」である。高壇式は埋葬部である玄室全体が羨道部床面より



第 19 図 13 号墓鷹段式横穴（玄室が高く造られている）



第 20 図 18 号墓出土フラスコ形須恵器（長柄町教育委員会蔵）

1.5m～2mほど高く造作された構造である。

長柄横穴墓群においては第6・8・9号墓を除くすべての横穴墓が「高壇式」の構造であると確認されている。

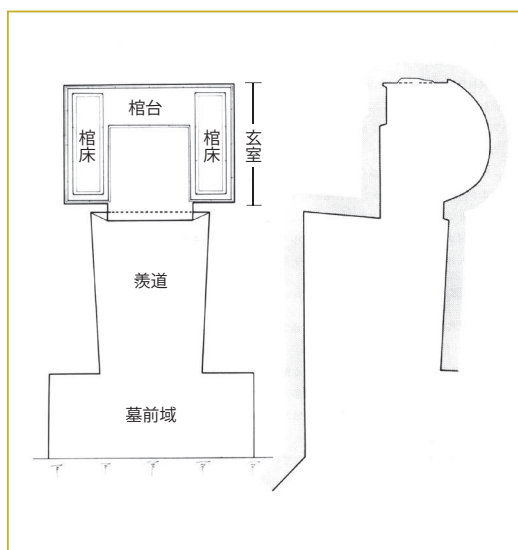
玄室天井部は寄棟形、切妻形の家形天井を意識して造られたものが特徴的である。

また多数の横穴墓の内部壁面には、多くの線刻画が確認されている。開口状態であったため描かれた時期は不明であるが、6・7・13号墓玄室内で人物・鳥・舟・建物などの図文が確認されている。

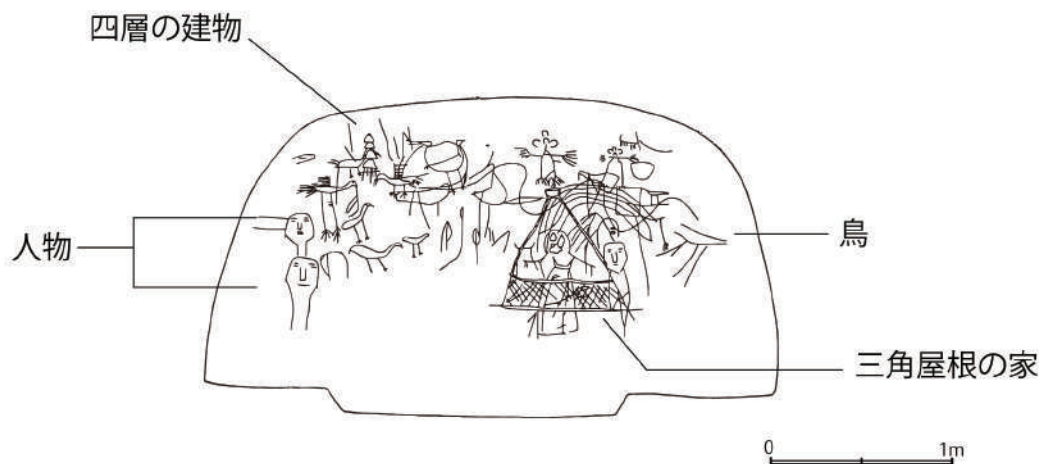
なかでも13号墓の奥壁に描かれた多層の塔は、仏教との関連を示すものとも考えられている。横穴墓の構築時期と同時代に描かれたものであるかは不明であるが、鳥の図文は東北地方などの横穴墓に認められるものと共通する。

平成5（1993）年の調査によって出土した遺物としては、14・15・19・20・21号墓の墓前域から、土器類として須恵器の坏・蓋、土師器の甕、鉄器として刀子・鉄鏃・鏑などが知られる。

また18号墓の羨道床面からは、胴部が円形で長い頸部を有するフラスコ形提瓶が完全な形で出土しており、7世紀前半ごろの構築年代が推定されている。



第21図 高壇式横穴墓の模式図



第22図 13号墓 玄室内奥壁 線刻画

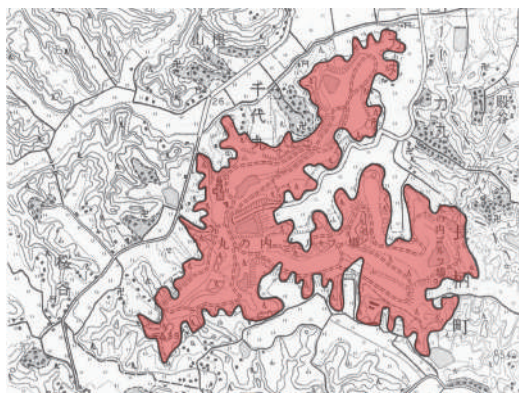
◆千代丸・力丸横穴墓群

千代丸・力丸横穴墓群は、千葉県長生郡長柄町力丸字廻ヶ谷に位置し、一宮川水系の大小の河川によって開折された谷戸の斜面に展開している。周辺には長柄横穴墓群、山崎横穴墓群など 1000 基をこえる横穴墓が確認されており、県内でも最も横穴墓が集中分布する地域として知られる。

昭和 62（1987）年に発掘調査が行なわれ、37 基の横穴墓が確認された。これらは、地域の特徴的構造である高壇式横穴墓が 31 基と主体を占めている。

横穴墓の展開範囲は横穴墓は分布状況に基づいて、第 1 支群（第 1～4 号墓）、第 2 支群（第 5～18 号墓）、第 3 支群（第 19～24 号墓）、第 4 支群（第 25～39 号墓）に区分され、それぞれが異なった集団の墓域として造営されたものと考えられる。

6 号墓は、斜面の上位、標高 63.50m 付近に位置しており、隣接して 7 号墓が所在している。天井は寄棟形である。6 号墓では奥壁および天井に線刻画が確認されている。奥壁はほぼ中央には家屋または倉庫と思われる建築物、天井には家屋と人形状の図文が確認され、遺物は土師器

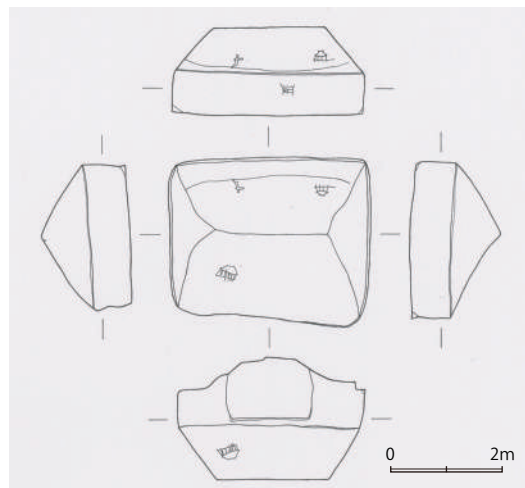


第 23 図 千代丸・力丸横穴墓群 範囲図

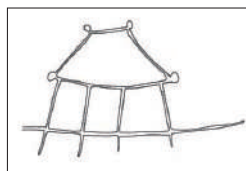
の坏が破片で出土しているのみである。

17 号墓は、横穴墓群のなかでも横穴墓が集中して分布する地区に位置しており、15・16・18 号墓と隣接している。玄室は埋葬施設によって玄室内をコの字状に区画した埋葬施設を高く造作している。本横穴墓群中でも特殊な形態を呈している。遺物は、羨道奥より須恵器の坏・蓋、鉄製品、玉類が多数出土している。

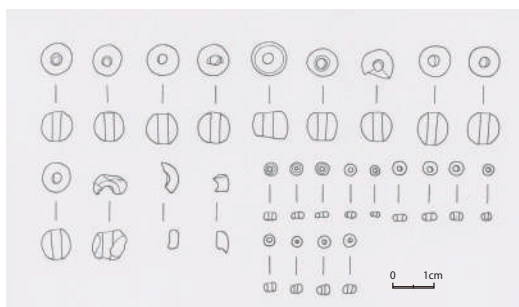
25 号墓は、斜面の中位に単独で位置している。横穴墓は大形の高壇式構造であり、天井は寄棟形を呈している。



第 24 図 6 号墓 玄室展開図



第 25 図 6 号墓 家屋図文



第 26 図 17 号墓 出土玉類

25号墓からは千代丸・力丸横穴墓群のなかでも特に多くの線刻画が確認されている。線刻画は、両側壁および天井に描かれており、左側側壁では馬、右側壁では人物・靫、天井には人物、弓、矢、翳などが描かれている。

遺物は、須恵器の大甕・長頸壺、土師器の坏などが墓前域の床面より出土しており、墓前域で多数の人びとが参集して行われた埋葬儀礼の痕跡として考えることができる。

26号墓は、斜面の中位に単独で位置している。横穴墓は大形の高壇式構造であり、天井は寄棟形を呈している。遺物は墓前域から集中して出土している。須恵器の坏・甕・長頸壺・広

口壺・横瓶・大甕・玉類などであり、土器類は甕を除いて、いずれも破碎されていた。これらは墓前域で行われた数回に及ぶ埋葬儀礼の痕跡であり、埋葬儀礼は使用した祭具を破碎して終了したことが確認できる。出土遺物の年代から7世紀代中葉の造営開始、第4四半期の追葬、8世紀後半までの横穴墓使用が想定される。

千代丸・力丸横穴墓群からは多くの線刻画が確認されているが、これらが描かれた時期は必ずしも明確にはなっていない。これは高壇式横穴墓の玄室を高く造作する構造は、基本的には入口部である羨道部を閉塞しない点に関連して開口の状況にあったことに起因するものである。



第27図 26号墓



第28図 26号墓 遺物出土状況



※縮尺不同

第29図 26号墓 出土須恵器〈長柄町教育委員会蔵〉

5 立正大学が調査した横穴墓群

関東地方で考古学が学べる大学は、いまや20校近く認められるが、戦前は帝国大学のほかは数校を数えるのみであった。立正大学はこのうちの一つであり、昭和7年には立正大学考古学会を創設して先輩諸兄が活躍されている。各大学は独自の目標を設けて研究を推進しており、立正大学にあっては古代寺院、古代窯業、古墳などを対象としてきた。

あわせて小規模調査ができる横穴墓の調査も精力的に進められてきた。昭和30年代の『立正考古』誌上には、大田区・久が原、品川区・大井、川崎市・新作所在の横穴墓などの調査成果が報告されている。また昭和49年には横浜市の南部で、奥壁に沿って造り付け石棺を造作した矢倉地横穴墓群を調査している。

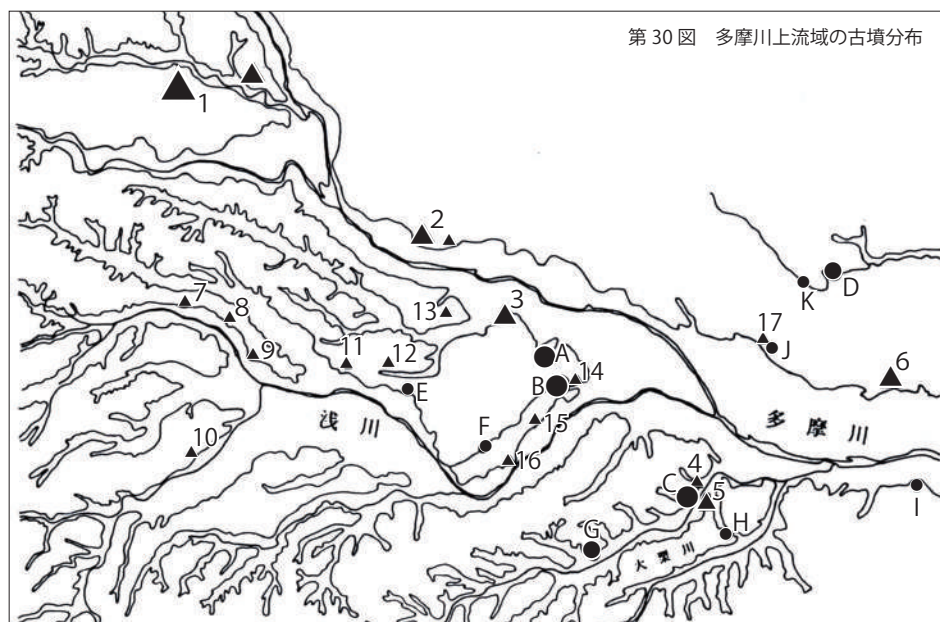
多摩川上流域の東京都多摩地区においても、精力的に横穴墓の調査を行ってきた。日野市の梵天山横穴墓群、同・坂西横穴墓群、多摩市・

中和田横穴墓群であり、当該地域における横穴墓調査の重要な成果を挙げている。

また神奈川県域の多摩丘陵地区では、鶴見川上流の恩田川流域に所在する大規模横穴墓群である熊ヶ谷横穴墓群、熊ヶ谷東横穴墓群を調査して多大な調査成果を挙げている。

また神奈川県大磯丘陵に展開した横穴墓の分布調査を、大磯町史編さん委員会の依頼により数年間実施して、大磯丘陵に展開した横穴墓の全容把握を完遂した。

北関東において特異な様相を示す栃木県宇都宮市の長岡横穴墓群は、明治41年に刊行されたMunroの“Prehistoric Japan”にとりあげられているほど著名ではあるものの、実態は不明であった。昭和61年にすべての実測調査を果たし、在地首長墓としての横穴式石室と関連する構造であることを確認した。



1. 瀬戸岡古墳群 2. 浄土・経塚下古墳群 3. セツ塚古墳群 4. 万蔵院台古墳群 5. 塚原古墳群 6. 高倉古墳群
7. 調井古墳群 8. 川口古墳 9. 鹿島古墳 10. 船田古墳 11. 鶴山古墳 12. 北大谷古墳 13. 小宮古墳
14. 明神上古墳 15. 寺坂古墳 16. 平山古墳群 17. 青柳古墳群 A. 坂西横穴墓群 B. 梵天山横穴墓群
C. 中和田横穴墓群 D. 国分寺・横穴墓群 E. 大和田横穴墓群 F. 平山台横穴墓 G. T.N.T No.446 遺跡 H. T.N.T No.34 遺跡
I. T.N.T No.513 遺跡 J. 東方横穴墓 K. 内藤新田横穴墓

◆東京都日野市・梵天山横穴墓群

梵天山横穴墓群は、多摩川に面する日野台地の南側斜面のローム層を掘削して展開する横穴墓群である。300mほどの範囲に展開する横穴墓の総数は、谷ノ上・神明上横穴墓群を含めて50基以上と想定される。

JR中央線の複線化に伴う調査を端緒として、都合5回以上の調査が行われており、立正大学考古学研究室は、昭和41年と48年の2回の調査を担当した。

併せて7基の横穴墓を調査しているが、この横穴墓群の最大の特徴は、横穴墓の墓前域の奥および両側の3方の壁面に河原石を小口積みを用いた石積みを施している点である。この墓前域の3方の石積みは、横穴墓の位置づけを視覚的に確認できるものがあり、群中の盟主的な横穴墓であったものと想定できる。

また内部構造は、複室胴張り構造を呈する横穴から矩形平面横穴墓への変遷過程を明示するものであった。複室胴張り横穴墓の構造は、八王子市・北大谷古墳、多摩市・稲荷塚古墳などの、当該地区における首長墓である高塚古墳に構築された横穴式石室の構造を写したものと想定される。

出土遺物は、銀装の大刀、飛燕型式の鉄鏃、土師器杯などであり、7世紀代終末に近い時期までの造営が考えられるものであった。



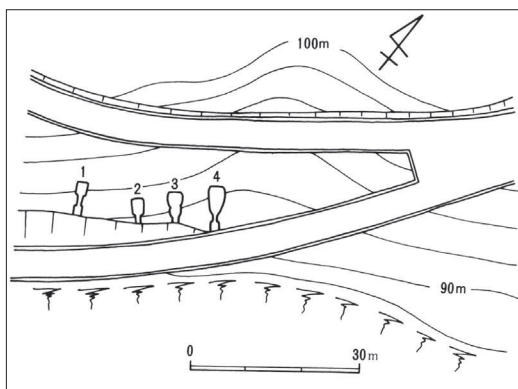
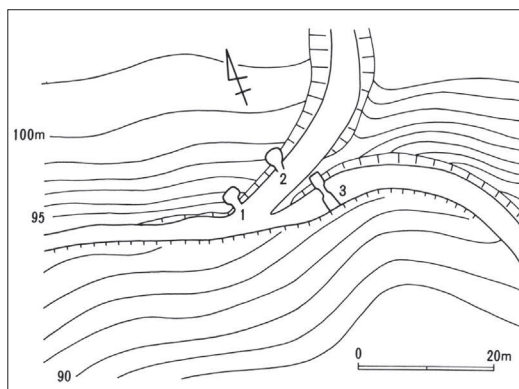
第31図 梵天山横穴墓群全景



第32図 1号墓 墓前域



第33図 4号墓 鉄鏃出土状況



第34図 平面図（左：昭和41年調査／右：昭和48年調査）

◆東京都日野市・坂西横穴墓群

坂西横穴墓群は、多摩川に面する日野台地の東側に形成された小規模な谷戸の北側斜面に、南に開口する7基の横穴墓が確認されたものである。横穴墓が所在する谷戸は、現在 JR 中央線が貫通して八王子方面に向かっている。

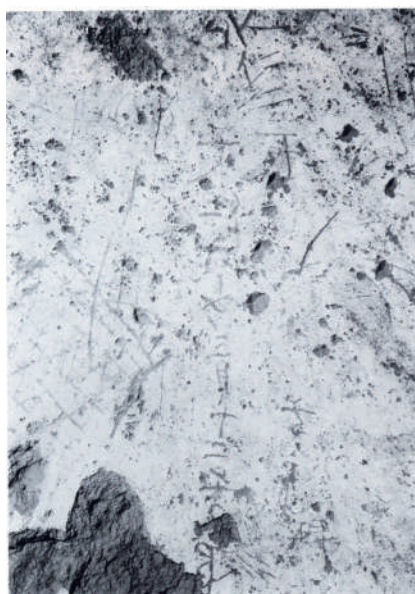
この横穴墓群では斜面の下部に幅 100cm ほどの墓道が確認され、墓道と個別横穴墓との関連で横穴墓の変遷が明確となった。①は墓道の一段上に構築された複室胴張り横穴墓であり2基が確認された。このうちの1基は墓前域に石積みが見られ、他の内部壁面には白色の漆喰を塗布し、この上に線刻図文を施していた。格子文などの他に切先の鋭い利器によって表された馬などがみとめられ、太い線により「永仁」の年号も認められた。

②は墓道を切り込んで低い位置に墓前域を設置した、玄室平面が矩形ないしは長方形の横穴墓である。

③は奥壁の幅を最大として前側幅を縮めた玄室台形平面を呈する横穴墓である。ここで確認された横穴墓の変遷過程は、多摩川流域地区の変遷の基本として重要なものとなった。



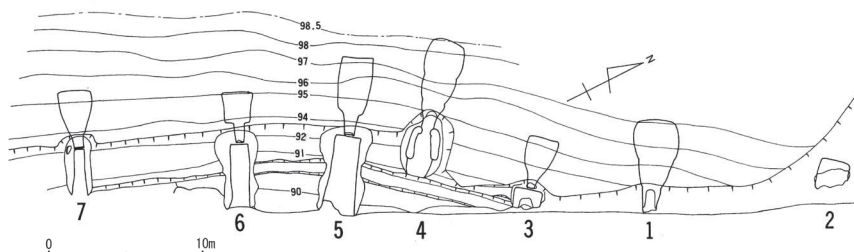
第 35 図 横穴墓前面の墓道



第 37 図 1号墓内部壁面「永仁」銘



第 36 図 1号墓内部壁面馬の線刻図文（赤線は加筆）



第 38 図 坂西横穴墓群 平面図

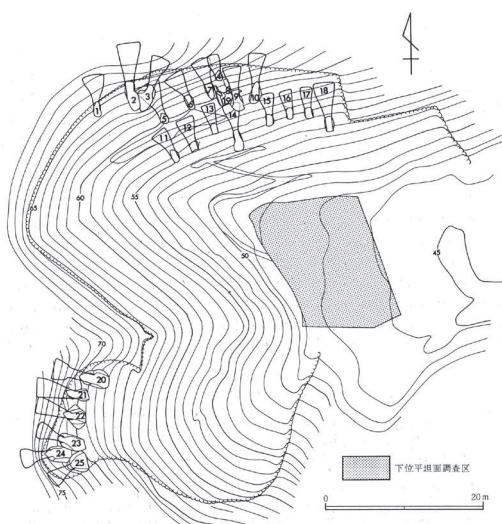
◆神奈川県横浜市・熊ヶ谷横穴墓群

熊ヶ谷横穴墓群は、恩田川支流の奈良川によって開析された谷戸の最奥部に形成された大規模横穴墓群であり、基盤の岩盤層を掘削して南側斜面の上位に 19 基、東側斜面の上位に 6 基の合計 25 基が確認された。

調査により出土した土器類からは、6 世紀末葉を上限として 7 世紀後半代に及ぶ造営年代が想定され、地蔵の線刻および陶器の出土から中世における再利用も確認できた。

この横穴墓群の最大の特徴は、3 号墓の内部壁面に確認できた線刻図文である。奥壁には胴部を斜格子で充填した 5 体の人物像、側面には船に乗る人物像、手を前で交差する哀悼の表現に見える脚部まで表した人物像など多数の図文が認められる。

この横穴墓が構築されて以降開口していなかったとは断言できないものの、確認できた多くの線刻図文は他の多くの類例との比較検討により古墳時代終末期のものとして良いと考えられる。



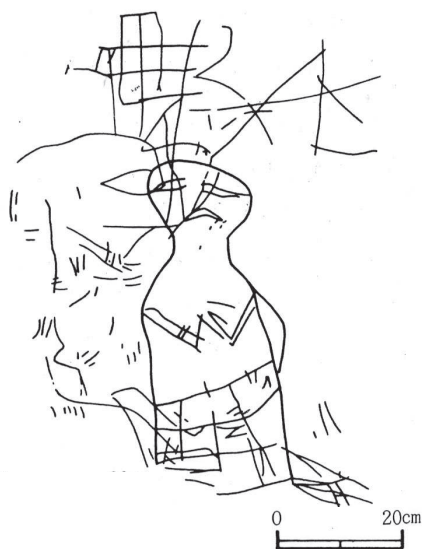
第 39 図 熊ヶ谷横穴墓群 平面図

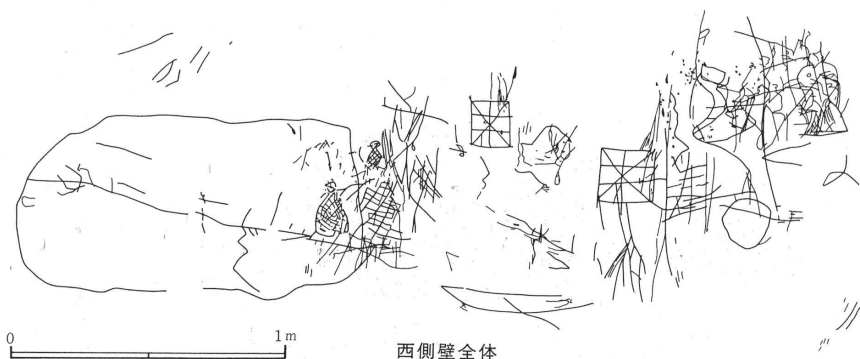
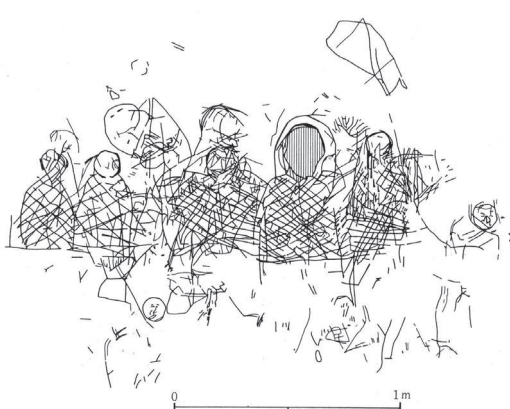


第 40 図 2 号墓 墓前域の土器出土状況



第 41 図 3 号墓内部壁面の線刻図文





西側壁全体

第42図 熊ヶ谷横穴墓群3号墓 内部壁面の線刻図文

◆神奈川県横浜市・熊ヶ谷東横穴墓群

熊ヶ谷東横穴墓群は、熊ヶ谷横穴墓群が位置する谷戸の入口部の東斜面に展開した7基からなる横穴墓群である。基盤の岩盤層を掘削して構築された横穴墓群であり、斜面の最下部には、7世紀初頭頃に操業した須恵器の窯跡が確認された。

7基の横穴墓は、須恵器の窯の操業が終わった後に構築されており、谷奥の熊ヶ谷横穴墓群との関連では、7世紀の前半代に分出した墓域と考えることができる。出土遺物は、胴部の丸く頸の長い形状の須恵器が特徴的である。

関東地方における横穴墓の葬送儀礼において、液体を入れたものと考えられる容器としての須恵器は、墓前域から出土する。大形の甕形土器、瓶形土器などは割られて出土するものも

あり、小形品では完形で出土するものも多い。

さらには西日本の九州および出雲地域における発現期の横穴墓群では、割られた須恵器甕の破片を異なった横穴墓に持ち込む事例も確認されるところであり、祖霊祭祀の実修とも考えられる。



第43図 出土須恵器

◆東京都多摩市・中和田横穴墓群

中和田横穴墓群は、多摩川の支流である大栗川によって開析された台地の南斜面に展開する横穴墓群であり、周辺に展開する横穴墓数は50基に近いものと想定できる。昭和20年代の三木文雄による数基の横穴墓の調査が端緒であり、立正大学考古学研究室が担当した昭和51年の調査により、新たに14基の横穴墓の存在が確認された。

横穴墓が展開する斜面上の台地縁辺には、日野市・万蔵院台古墳群が位置している。古墳群は河原石を使用した横穴式石室を構築した3基からなるものであり、6世紀末葉から7世紀代前半代にかけて築造されている。

大栗川の対岸には、7世紀前半代の地区首長墓としての切石を使用した胴張り型式の横穴式石室を構築した稲荷塚古墳、これに継続する白井塚古墳が位置しており、周辺には6世紀代以降に築造された高塚群集墳も展開している。

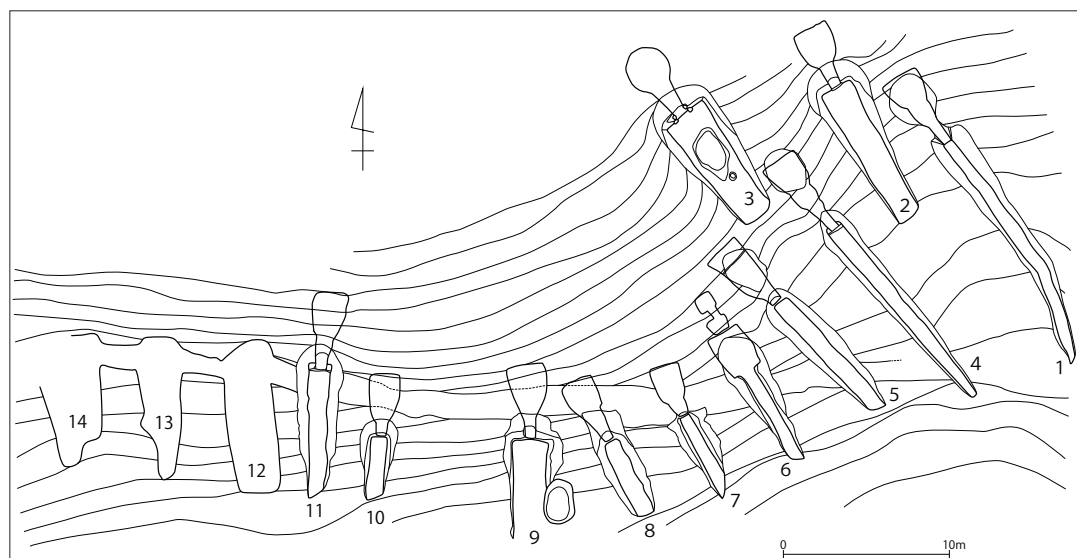
中和田横穴墓群は、斜面に並列して横穴墓が展開しており、個別横穴墓の立地に従って墓前域（墓道）の長さが規定されている。すなわち



第44図 調査区全景

緩傾斜である東側に立地する横穴墓の墓道は長く、西側の急傾斜部に立地する横穴墓の墓道は短くなっている。確認した14基の横穴墓のうち西側の3基は保存のために調査していない。

横穴墓の構造は、①・複室胴張り構造、②・矩形ないしは長方形玄室平面横穴墓、③・奥壁を最大とする玄室台形平面横穴墓の順に変遷したものと想定することができる。この変遷は坂西横穴墓群で確認されるところに等しく、7世紀代における展開と考えられる。



第45図 中和田横穴墓群 平面図

◆中和田 3 号墓

3 号墓は唯一斜面の上位に位置している。これは群内における構築最末期に位置したためと考えられる。玄室の平面形は径 290cm の円形、天井の高さは 150cm、羨道は奥側の幅 140cm、入口幅 90cm、長さ 200cm の規模である。墓前域は奥幅 300cm、前幅 220cm 長さ 770cm の規模である。

この横穴墓で確認できた特徴的な事象は、墓前域における明確な追葬面の確認である。本来は墓前域の床面から羨道入口へは高さ 50cm の段が設けられていたが、追葬時には羨道床面と同じ高さに追葬面を設けており、この面から複数の須恵器の長頸瓶が割られた状態で出土している。7 世紀終末の追葬時における葬送儀礼の執行を確認することができる。

追葬面に合わせて、横穴墓入口の両脇には長

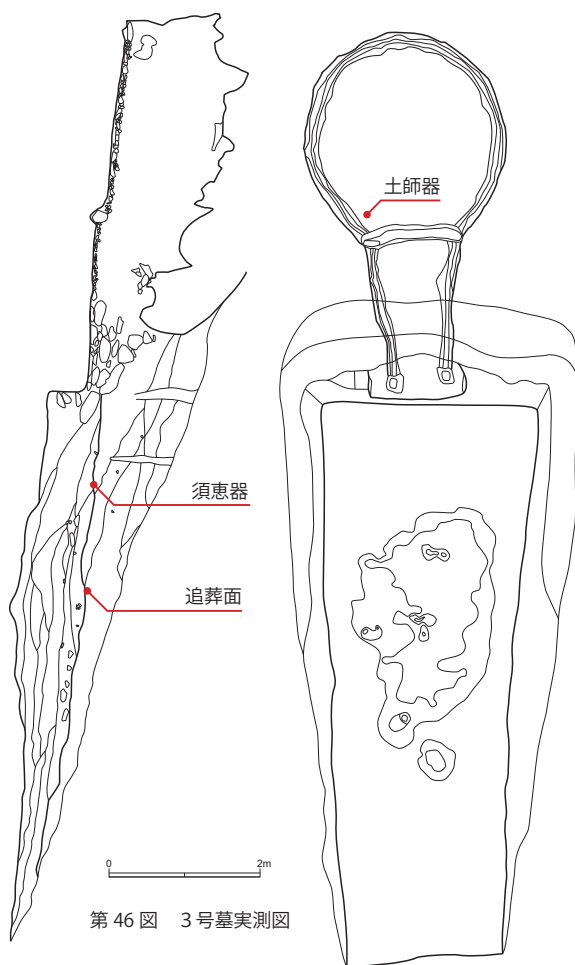
さ 60cm 大の大形の河原石を立てて補強しており、横穴入口部天井の崩落に起因するものと考えられる。

この横穴墓の内部からは、土師器の盤状杯が出土している。8 世紀の前半代の年代が考えられる土器であり、横穴墓の最終の使用実態を表すものである。同時期の盤状杯は日野市・神明上横穴墓において、横穴墓からの改葬用の墓である土坑墓から出土している。

この 4 号墓の玄室円形平面という点は、類例の少ないものである。確認できた横穴墓構造の変遷では、②段階の矩形平面の変形として位置付けられる。

中和田横穴墓群では並列する横穴墓のうち、9 号墓と 10 号墓との間には十分な間隙があるにもかかわらず、横穴墓は構築されていない。これは横穴墓群中の支群の違いを明確にするものであり、1～9 号までのまとまりを示すものと思われる。

9 基の横穴墓は 1 時期 3 基を基本とする 3 代にわたる変遷と確認できるが、横穴墓の造営主体は同時期に複数の横穴墓を構築しており、造営主体は細分化以前の大規模段階であったものと思われる。



第 46 図 3 号墓実測図

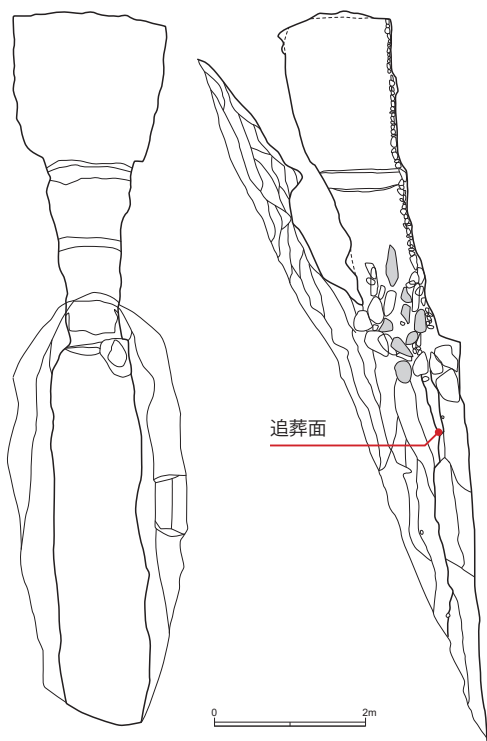


第 47 図 墓前域追葬面上の遺物出土状況

◆中和田 8 号墓

8 号墓は、並列する横穴墓群のうち東側支群の西側に位置している。玄室奥壁幅 210cm、前幅 160cm、長さ 210cm の前幅の狭まった、前壁を有する段階の矩形平面横穴墓であり、奥壁高は 140cm を測る。羨道は奥幅 120cm、前幅 70cm、長さ 250cm の規模であり、墓道床面と羨道入口とは、高さ 40cm の段を造作している。

墓道の土層堆積状況からは追葬の痕跡が確認でき、横穴墓の玄室床面には北西隅に片付けて集積された人骨と、東側壁沿いに伸展埋葬された人骨が確認された。埋葬人骨に伴って 2 本の直刀、14 本の鉄鏃と 6 本の刀子が副葬されていた。横穴墓群内で最も多くの武器類を出土した横穴墓である。



第 48 図 8 号墓実測図

8 号墓に並列する 6 号墓・7 号墓の 2 基の横穴墓は、全体規模、主軸方位が類似するものであり、構築時期の近接することが想定できる。

6 号墓は長方形玄室平面を呈する前壁の明確な構造であり、玄室の奥に小形の室を造作しており内部からは直刀を伴う改葬骨が出土している。

この 6 号墓が、②段階でやや先行して構築され、継続して 7・8 号墓、さらには 2 号墓が構築されたものと考えられる。②段階の横穴墓の構築された時期は、出土武器類の様相から 7 世紀中葉と考えることができる。



第 49 図 遺物出土状況



第 50 図 人骨出土状況

◆中和田 11 号墓

11 号墓は、並列する横穴墓群のうち西側支群の東側に位置している。玄室奥壁幅 230cm、前幅 90cm、長さ 300cm の前幅の狭まった台形玄室平面を呈する横穴墓であり、奥壁高 180cm を最高として前側に従って低くなるアーチ形天井構造である。羨道は奥幅 90cm、前幅 50cm、長さ 220cm の規模であり、墓道床面と羨道入口とは 40cm の段を造作している。

確認された横穴墓の閉塞は人頭大の河原石を使用して行われており、中間に厚い土層を挟んだ状況から追葬がおこなわれたことが確認できた。横穴墓内部の石敷きの玄室床面上には、東西の両側壁に沿って 2 体の人骨が埋葬されていた。西壁沿いの遺存状況の良好な人骨は埋葬後

に片付けて集積されたものであり、東側壁沿いの一体は頭位を奥側にした伸展葬と確認された。

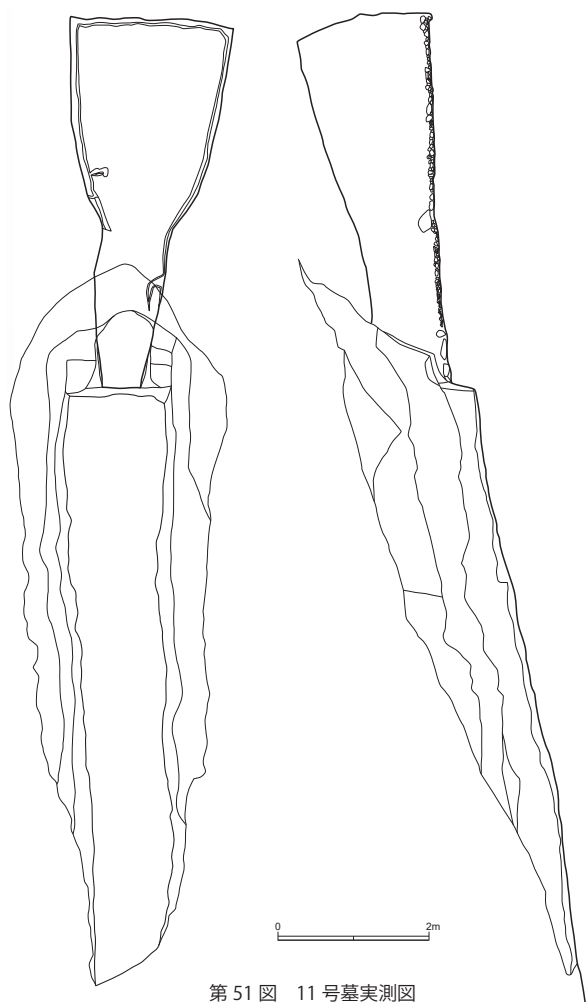
遺体に副葬された武器としては、直刀 1 本と小鉄刀 1 本、16 本の鉄鏃が出土しており、横穴墓群内では豊富な武器の出土と確認される。

出土した直刀は、全長 72cm の細身のものであり、鯨切先で上部に 2 個の小円孔を穿った鐔を伴うものである。16 本の鉄鏃はかなりの変容を示すものの、大形の平根腸袢り型式のものであり、出土例に限られる。

また墓前域の追葬面上からは、先端が開くピンセット状の形態を呈する摂子と、2 本の針が出土しており、ともに鉄製品であった。摂子は列島内の古墳から 30 例ほどの出土が確認されるものであるが、機能は明らかにはなっていない。直刀に共伴する事例が多く、懸垂用の道具とも考えられるものである。

鉄製の針の出土も稀なものである。長さ 7.8cm を測る資料の基部は平坦化され、円孔の痕跡も確認できる。

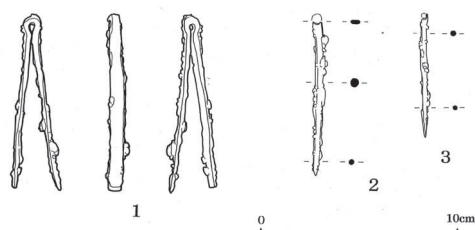
出土遺物から想定される横穴墓の構築時期は 7 世紀の中葉であり、後半代にかけて追葬され、造営されたものと想定できる。



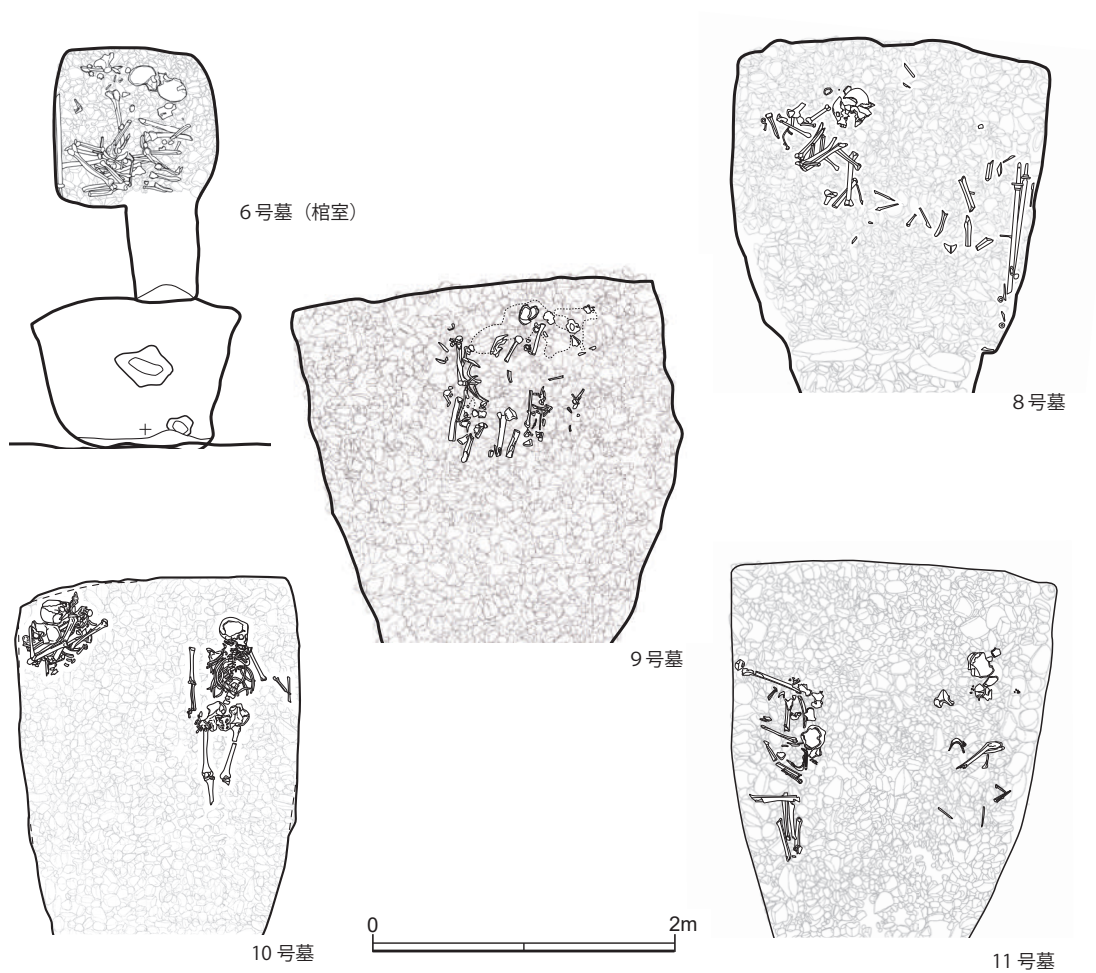
第 51 図 11 号墓実測図



第 52 図 遺物出土状況



第 53 図 摂子と針



第54图 人骨出土状况集成



第55图 10号墓人骨出土状况



第56图 11号墓人骨出土状况

◆出土遺物と人骨

【土器類】中和田横穴墓群から出土した副葬品は多くはない。土器類の出土は図示できるもので15個体を数えるのみである。このうち高さ27cmを測る1の円形胴部に細長い頸部を有する須恵器のフラスコ形瓶は、9号墓の墓前域から出土したものである。堅緻に焼成され、胴部最大径が胴部の高さを越え、頸部に二条線を有さない形状を呈するものであり7世紀第3四半期頃の所産年代が想定されるものである。

8は高さ23cmを測る台付き長頸瓶であり、2号墓の墓前域覆土中から出土した。肩部の丸い形状であり、7世紀末葉頃の年代が想定される。

4は7号墓の墓道部から出土した須恵器の平瓶である。高さ16cmの単純口縁を有する頸部が、胴部の中央寄りに垂直に近く立ち上がる小形のものであり、7世紀の中葉の年代が想定される。

5の大形平瓶も2号墓の墓前域から出土したものであり、7世紀の中葉の年代が想定できる。

6の高さ23cmを測る台付き長頸瓶と7の頸部は、ともに3号墓の追葬面から出土したものである。液体の容器として使用された後に破砕された状況であった。肩部の突出する形状であり、8世紀の初頭頃の年代が想定される。

14の口径16cmを測る土師器の盤状杯は、3号墓の内部から出土したものであり、8世紀前半代に行われた追葬時の副葬品と考えられる。

出土土器類は総じて7世紀中葉から8世紀代にかけての所産と想定できるものである。

【武器類】武器類が出土した横穴墓は限定される。6号墓の玄室奥の小形室から改葬人骨に伴って直刀1本、8号墓から直刀2本・鉄鏃14本・刀子6本、11号墓から直刀1本・鉄鏃16本・刀子1本が出土したのみである。

これらのうち特に注目できる武器は、上部に2個の小円孔を穿った鐔を伴う直刀である。6・

8・11号墓から1本ずつ、合計3本出土している。6号墓出土例は全長69cmでふくら切先を呈する刀身の太いものである。8・11号墓から出土した資料は、ともに鯨切先を呈する細身の刀身であり、6号墓出土例が年代的に古い様相を呈している。

この種の特徴的な鐔を伴う直刀は東国で24例が確認され、このうちの半数が房総半島中央部の古墳から出土している。類似した様相を示す鐔を伴う直刀も房総半島に集中する傾向が認められ、その中心に千葉市・東南部古墳群が位置している。

中和田横穴墓群から出土した3本の特徴的な直刀は、分布を勘案すると房総半島部で7世紀前半代に製作された可能性の高いものであり、地域間交流を示す事例と理解できる。

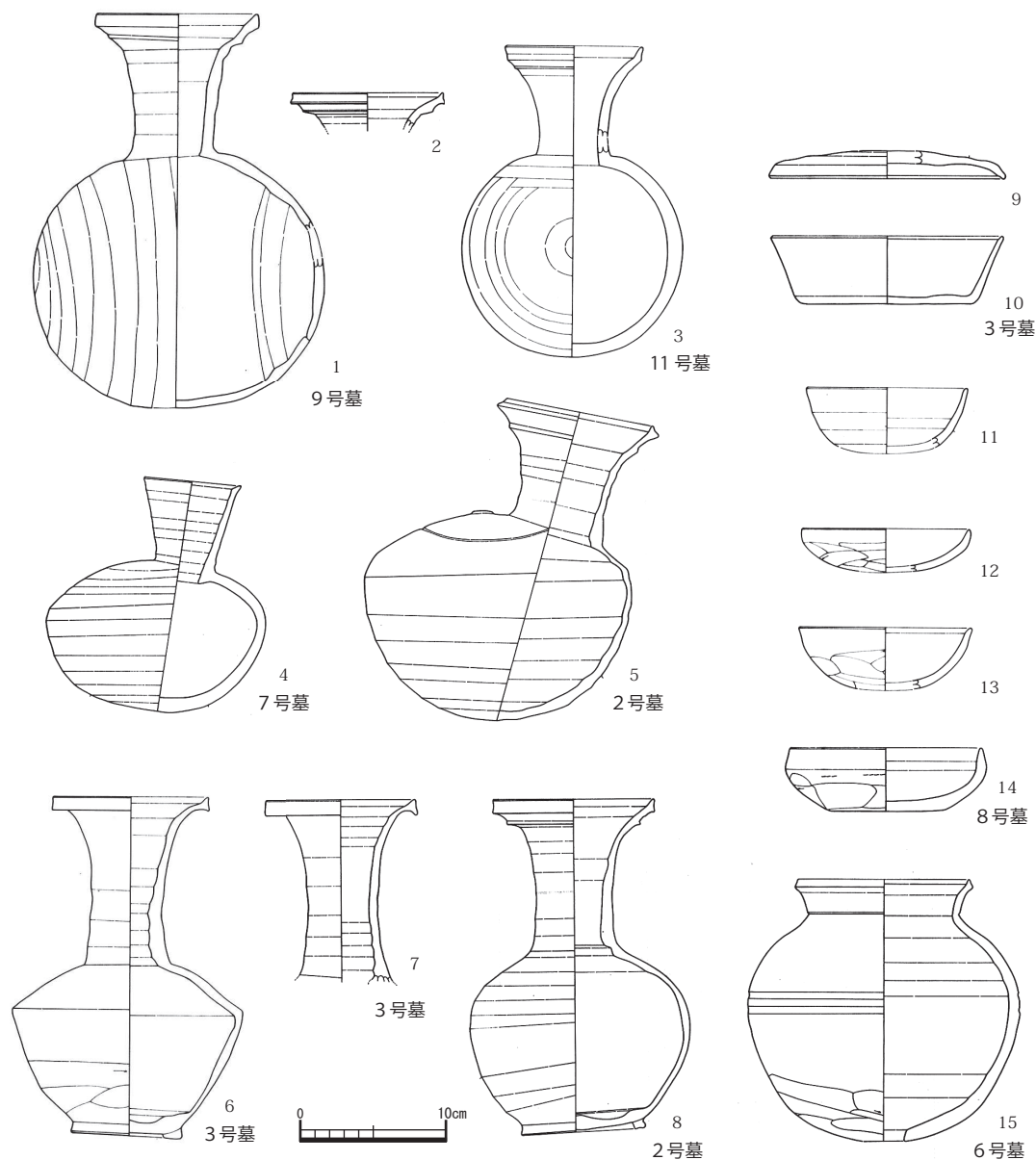
【出土人骨】中和田横穴墓群のうち、調査により被葬者の人骨が出土したのは、6・8・9・10・11号墓の5基である。個別横穴墓から出土した人骨は2体を基本としており、横穴墓造営集団内の限定された階層のみを埋葬対象としてもと考えることができる。

横穴墓における埋葬は様々に行われている。①は個別の横穴墓内で埋葬を完結する類型、②は第1次葬として通常規模の横穴墓を使用し、改葬用に小形の横穴墓を隣接して構築する類型、③は通常規模の複数の横穴墓を第1次葬と改葬用に区別して使用する類型である。列島内各地で時期に従って、これらの埋葬様式が確認される。

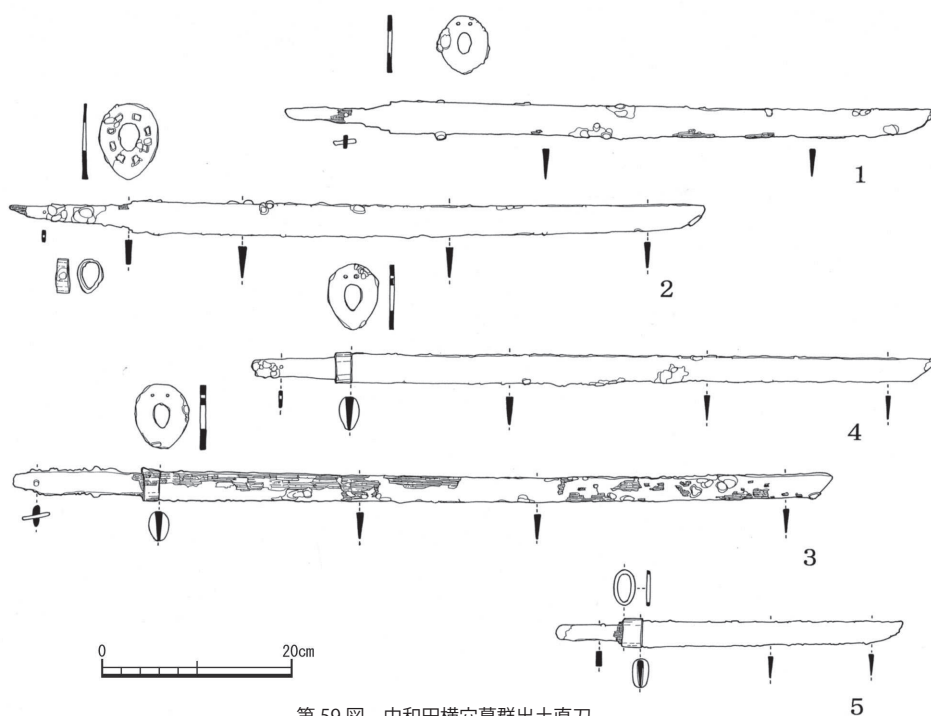
中和田横穴墓群で確認できる場所は、6号墓以外は個別横穴墓内における埋葬の完結であり、先葬者の人骨を玄室隅に片付けて集積し、追葬者を伸展葬するものである。横穴墓集団の個性を表すものである。



第 57 図 須恵器 (左から 3 号墓・2 号墓・11 号墓・2 号墓) ※縮尺不同



第 58 図 中和田横穴墓群出土土器



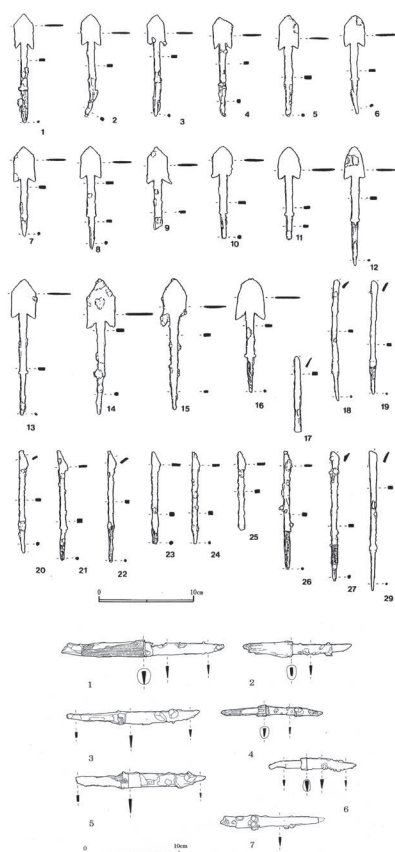
第 59 図 中和田横穴墓群出土直刀



第 60 図 11 号墓 直刀出土状況



第 61 図 11 号墓 鉄劔等出土状況



第 62 図 中和田横穴墓群出土鉄劔と刀子

6 おわりに ～横穴墓研究の課題～

昭和の末年から平成のはじめにかけて全国各地で盛んに行われてきた横穴墓の調査は、近時低調になっている。これは主として道路網の整備などに伴う国土の再開発事業の終焉に起因するものと考えられる。

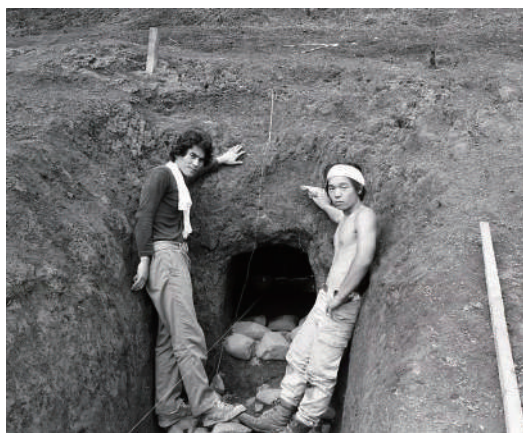
道路整備に伴う横穴墓の調査は、出雲においてはそれ以前の長年にわたる横穴墓の調査数を一気に上回り、研究を進展させてきた。九州においては初現期横穴墓の実態が明確になってきており、横穴墓が濃密に分布する関東・東北各地における調査も、この30数年に及ぶ調査により大きく進展してきた。

今後に残された横穴墓の主要な研究課題は、以下にまとめることができる。

- ①横穴墓の発生に関する研究は、朝鮮半島南部の百済の地における初現期横穴墓の存在を勘案すると、今後の調査に期待する点が大い。
- ②列島各地における特徴的な構造の横穴墓は、型式学的検討により源流の地の横穴墓と波及先の横穴墓との関連は、ほぼ明確になってきた。東国各地に波及・定着して地域の特徴を明示する展開期横穴墓の様相も明確になりつつある。しかしながら、房総半島地域における高壇式横穴墓など、未だ発現に至る過程が明確になっていない横穴墓型式もあり、今後の継続的研究を要する。
- ③横穴墓は群集性を最大の特徴として造営された古墳時代墳墓であるが、研究の基本としての横穴墓群の群構成の検討は十分には果たされていない。これは小形高塚古墳により構成された群集墳も同様であり、群構成に造営集団の個性が反映するという研究視点の欠如が認識される。
- ④横穴墓造営集団の性格の追求も、重要な研究課題である。統一的な視点のみではな

く、横穴墓制を導入した地域性を勘案した地域・時期により異なる点が問題となる。

- ⑤横穴墓群は、それのみで完結して造営されるものではない。群集墳と同様に地区の首長に管理され、地域首長に管掌されたものと考えられる。地区首長墓としての横穴式石室を構築した高塚古墳、発現期に限れば地域首長墓としての前方後円墳との有機的関連性の追求であり、不十分な現状である。
- ⑥出土遺物の研究に基づく地域間交流、古墳文化の中核地である近畿地方の有力集団との関連性の追求も課題となる。各地の横穴墓から出土する各種の儀仗用大刀、金銅装馬具などの文物の検討が必要となる。
- ⑦出土人骨の検討も重要な研究課題である。人骨の出土状態から想定する埋葬様式の検討はある程度進んでいるものの、人類学的検討は未だ十分ではない。分析内容を保証する機関のもとでの検討を、確実に進展していかなければならない。



昭和51年 中和田横穴墓にて
(右：遠藤政孝さん、左：水本雄三さん、撮影：竹花宏之さん)

【参考文献】

- Edward S. Morse "Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery" 1901(明治34年)
赤星直忠 『鎌倉市史』(考古編) 昭和35年
山本 清 「横穴の型式と時期について」『島根大学人文科学論集』第11号 昭和37年
E.S. モース・石川欣一訳『日本その日その日1・2・3』(東洋文庫171・172・179) 平凡社 昭和45・46年
坂詰秀一編 『日野市梵天山横穴墓』 昭和48年
金井塚良一 『吉見百穴横穴墓群の研究』 昭和50年
久保常晴編 『日野市坂西横穴墓』 昭和51年
坂詰秀一・池上悟 「東京都多摩市中和田横穴墓群の調査」『考古学ジャーナル』第130号 昭和51年
竹並遺跡調査会 『竹並遺跡』 昭和54年
池上 悟 『横穴墓』(考古学ライブラリー・6) ニュー・サイエンス社 昭和55年
日野市史編纂委員会 『日野市史料集』(考古資料編) 昭和59年
立正大学文学部考古学研究室 『武蔵・熊ヶ谷横穴墓群』 昭和59年
立正大学文学部考古学研究室 『武蔵・熊ヶ谷東遺跡』 昭和61年
池上 悟 「横穴墓の被葬者と性格論」『論争学説・日本の考古学』第5巻 昭和63年
氏家和典 『東北古代史の基礎的研究』 昭和63年
長生郡市文化財センター 『千代丸・力丸横穴墓群』 平成3年
松本昌久 「東上総における横穴墓について」『多知波奈』橘考古学会 平成5年
池上 悟 「南武蔵における古墳出土の鉄鏝について」『多知波奈考古』第2号 平成9年
山陰横穴墓研究会 『山陰の横穴墓』 平成9年
池上 悟 『日本の横穴墓』雄山閣 平成12年
千葉県 『千葉県の歴史』資料編 考古2(弥生・古墳時代) 平成15年
忠清文化財研究院 『公州丹芝里横穴墓群』 平成16年
池上 悟 『日本横穴墓の形成と展開』雄山閣 平成16年
大磯町教育委員会 「横穴墓群」『大磯町史』10 平成19年
埼玉県立さきたま史跡の博物館 『吉見百穴と東日本の横穴墓』 平成19年
池上 悟 「モースの古墳研究」『品川歴史館紀要』第23号 品川区立歴史館 平成20年
池上 悟 「下野長岡百穴横穴墓群の様相」『栃木県考古学会誌』第30集 平成21年
足立佳代 「坪井正五郎の墓所」『日本考古学史研究』創刊号 平成23年
池上 悟 『横穴墓論攷』六一書房 平成27年

【立正大学博物館：第11回特別展】横穴墓

発行日：平成28年11月22日

編集・発行：立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL：048-536-6150 / FAX：048-536-6170

E-mail：museum@ris.ac.jp

URL：http://www.ris.ac.jp/museum/